みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

コミュニケーションツールとしての「みんぱっく」：ミュージアム・アウトリーチキットの可能性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 優香 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001648

森茂岳雄編『国立民族学博物館を活用した異文化理解教育のプログラム開発』
国立民族学博物館調査報告　56:237-245(2005)

コミュニケーションツールとしての「みんぱっく」
――ミュージアム・アウトリーチキットの可能性――

佐藤　優香
国立歴史民俗博物館

1 はじめに
2「みんぱっく」の概要
3「みんぱっく」の開発と研究交流会「みんぱっく厨房」
4 情報のデザインとプログラムのパッケージ化
5 むすび

＊キーワード：アウトリーチキット，学校と博物館，パッケージ化，情報のデザイン，コミュニケーションツール

1 はじめに

近年，総合的な学習の時間の導入にともない，学校教育における博物館利用への関心が高まっている。多くの博物館が，「学習」や「教育」のための仕組みづくりを始めているし，学校もまた積極的に博物館を利用したいと考えている。総合的な学習の時間は，学習内容は明細化されていないものの指導要領に「例えば国際理解，情報，環境，福祉・健康などの横断的・総合的な課題，児童の興味・関心に基づく課題，地域や学校の特色に応じた課題などについて，学校の実態に応じた学習活動を行うものとする」とうたわれており，ここにあげられている国際理解，環境，福祉等をテーマにしている学校が多い。「博物館」利用と「国際理解」というテーマが重なり，世界の民族の暮らしをテーマにかかげる国立民族学博物館（以下「民博」と略）が，学びの場としてますます注目されることは容易に予想される。実際，平成10年度より民博が開始した標本資料の学校への貸し出しには多くの依頼が寄せられた。しかしながら，資料管理の専門家を配置しない学校への貸し出しには，手続きのこと，安全管理のことなど，様々な問題が生じていた。学校側も，膨大な資料の中から必要なものを選ぶことが容易でないうえに，資料についての十分な解説も得にくく，簡便で有効な利用には整備が必要であると考えられた。こうした背景があり，貸し出す側，借りる側の双方にとって最善のあり方のひとつとして，民族学学習キットの制作が始められた[1)]。

学校や他の博物館への調査を経て，「みんぱっく」は，国立民族学博物館の貸し出し用民族学学習キットとして開発された。「子どものための持ち運びできる小さな博物館」として，スーツケースにさまざまな地域の民族衣装や生活道具などが詰められている。

「みんぱっく」という名称は，民博（みんぱく）という音にかけ合わせているのはもちろんのこと，MINは，mini（小…），minimum（最小限の），minor（小さい方の，サブの，２番目の）の略号であり，みんぱっくが小さい民博であるということを表している。またMINは，モノに出会い（Meet），各地域や民族のことを想像し（Image），そこから自分の次なる学びへつなげていく（Next）ということを伝えてもいる。

「みんぱっく」の開発は，平成12年度よりスタートした。現在，イヌイット，ペルー，インド，インドネシア，アラブ，ブータン，ソウル，ブリコラージュの８種類のパックが貸し出しされている。筆者は，平成13年度から調査開発にかかわり，各キットの開発と運用に携わってきた。本稿では，これらパックの制作過程をふりかえりながら，博物館におけるアウトリーチキットの可能性について考える[2)]。

2「みんぱっく」の概要

キットの制作は，内外の博物館の先行事例や，学校への調査を行うことからはじめられた。その結果，学校からの要望が高かった民族衣装をいずれのパックにも含むかたちで，いくつかの地域ごとにパッケージされることとなった。対象は，「総合的な学習の時間への活用と国際理解教育への効果を配慮し，小学校高学年から中学校の児童生徒を中心とした利用を想定した体裁とする。ただし，内容については対象年齢のしばりを受けにくいものを考える」こと，また「標本資料は使用せず，消耗品として購入できるものを使用する。破損・紛失に容易に対応できるように，手にいれやすいものを使用する」ことが提案された[3)]。

○パックの種類

１年めに実施された学校への調査とモノ資料の購入を経て，翌年度からはそれらモノの整備とモノにかんする情報をどのようにして提供するかが検討された。年度末には，「極北を生きる―カナダ・イヌイットのアノラックとダッフルコート」，「アンデスの玉手箱―ペルー南高地の祭りと生活」，「ジャワ文化をまとう―サルンとカイン」，「イスラム教とアラブ世界の暮らし」，「ブータンの学校生活」，「インドのサリーとクルター」，「野林リュック」の７種[4)]の「みんぱっく」が貸し出しできるものとして整えられた。

これら７種は，キット化するために担当教官がトピックを立て，それにあわせてモノを選定するという手法で制作された。例えば，ペルーのパックには，民族衣装が祭礼用と日常着の２種類入っているほか，学校への調査で要望の高かった楽器類と乾燥ジャガイモやとうもろこしなどがパックされているし，ブータンのパックは，学校生活をテーマにしており，民族衣装のほか通学カバンや教科書，弁当箱などがパックされている。各パックに入れるものは，ミュージアムショップの協力や，担当教官が調査研究を行っ

ている際に得たネットワークなども利用して集められた。

平成13度年度には，特別展「ソウルスタイル」にあわせた「韓国・ソウルの子どもの一日」と，「インドネシアジャワの芸能」が，平成16年度には特別展「アラビアンナイト」にあわせて「アラビアンナイト」のパックが，企画展「きのうよりワクワクしてきた。ブリコラージュ・アート・ナウ日常の冒険者たち」にあわせて「ブリコラージュ」のパックがそれぞれ開発された[5]。

○ティーチャーズパック

集められたモノ資料を「みんぱっく」としてパックするに際し，研究者に蓄積された情報を伝えるためのツールの開発が行われた。情報部分をいかにして児童生徒らに提供するかは教師の授業デザインによることから，情報パッケージは「ティーチャーズ・パック」と名付けられた。以下がその内容である。

〈モノ情報カード〉

パックされているモノひとつひとつについての情報を伝えるもので，基本的にはモノひとつにつきカード1枚（A5版），という形式をとっている。おもて面にモノの写真と現地表記によるよび名，うら面に日本語の名称，使い方（服については着付け方），担当教官からのちょっとしたメッセージ，などが記されている。このメッセージでは，実際にその地域で調査をしている研究者ならではの視点や情報が紹介されている。個々のモノにまつわる情報を伝えることで，そのモノがもつ「おもしろさ」を知ってもらいたいと考えられている。

〈「みんぱっく」ガイド〉

「みんぱっく」全体についてのコンセプトシートと，それぞれのパックについてのテーマシート，内容物一覧，取り扱い説明がファイルされている。

・コンセプトシート

「みんぱっく」の全体像や，民博から教師へのメッセージを紹介する冊子。

・テーマシート

それぞれのパックの紹介と担当教官からのメッセージの冊子。テーマシートを通じて，各パックを担当している教官が持っている「フィールドをみるまなざし」「世界をみるまなざし」のようなものを感じることができると考えられる。おすすめの図書やURL，関連施設なども紹介されている。

・内容物一覧

パックされているモノの写真が一覧表になっている。返却時には，別に用意されたこのシートのコピーを使って確認することができる。

・取り扱い説明

「みんぱっく」の資料は，後々まで収蔵しておく標本資料という位置づけでは

ない。しかし，博物館から貸し出す資料として，また多くの人が利用するものとして，大切に扱ってもらいたいと考えられている。そこで，博物館の標本資料を扱う場合にも通用するような取り扱いの説明書がファイルされている。モノについての情報は，教師も児童生徒も同じように探求していくことを勧めるが，取り扱い方法については，教師が一歩リードしていることがのぞましいと考えられた。

〈フィールドアルバム〉

A 3サイズのカラー写真集ファイル。パッケージされているモノが使われている様子，衣食住の様子，その地域の風景や子どもの様子がわかるような写真数点に簡単な解説がつけられている。授業で児童生徒に見せるためにも使うことができるよう大きなサイズになっている。

〈『季刊民族学』関連ページ集〉

『季刊民族学』に掲載されている各パックに該当する記事をコピーしてひとつのファイルにまとめたもの。

〈そのほか〉

上記のほかに，参考となる図書や特別展の図録，ビデオが入れられている。

このように，「みんぱっく」には，手に取って自由に扱うことのできる実物の資料と，それにまつわる情報が地域やテーマのくぎりをもって編集されパックされている。それぞれはロゴの入ったスーツケースに納められ，簡便に持ち運びすることができるようになっている。

3 「みんぱっく」の開発と研究交流会「みんぱっく厨房」

様々な立場からの意見を採り入れて開発を進めていくために調査研究と交流の会が開催されてきた。開発していくための調査を行うだけではなく，「みんぱっく」制作に関わる人，関心を持つ人が共に集い，情報を交換したり，語り合ったりするための場でもある。通称として「厨房」と名付けられているのは開発中という素材の段階にある「みんぱっく」をみんなで料理しようということと，「みんぱっく」は素材であり使用者が料理することでよりおいしく（より効果のある使い方と）なる，ということにかけている。筆者がファシリテーター役となり，ワークショップ形式で企画運営された。出席者は，民博のスタッフ，展示会社スタッフ，デザイナー，小中学校教諭，教育学研究者，博物館関係者，大学生（院生をふくむ）などであった。

「みんぱっく」のような学校教育を対象にしたアウトリーチキットは，学校と博物館を結ぶツールとして大きな可能性を持っていること，またその利用方法の開発や情報交換の場が必要であることなど，このような場が有効であることは想像に易い。

「みんぱっく」は，試行運用のころから現在に至るまで，使用されたすべてのケースについて質問紙による調査が行われてきた[6]。先の研究と交流の会や質問紙調査のように，利用者との関わりの中で制作をすすめることは，このようなキットをよりよい学びのリソースとして発展しつづけることができるものにするだろう。

アンケートによれば，学校からの「みんぱっく」への期待は大きい。しかし，モノを用意し，貸し出すだけでは，教師らの期待に応えきれないという面もあるようだ。教師らは，気軽に相談でき，気軽に貸出できることを望んでおり，筆者が試行校の教師らと行った打ち合わせや事後の聞き取りでは，「本物がもつ力」と，「博物館とともに授業をつくる」という言葉がくりかえし使われ，強調されていた。それは，学校対博物館という機関のつながりではなく，ひとりの教師として博物館の人と対話することを通して，授業づくりをしていきたいということではないだろうか。博物館と授業をつくるというのは，モノだけではなしえない。アウトリーチキットを学校教育を支援するツールとして，また博物館と学校を結ぶツールとして成り立たせるということは，そこに人の介在ぬきにはありえないということになる。言い換えれば，キットは，キットだけで存在できるものではなく，そこに教師とともに，新しい学びを考え，語り合うことが必要になってくる。

4 情報のデザインとプログラムのパッケージ化

キットにかかわる情報をどのようにデザインするのか，その情報のかたちと提供の仕方について，これまでの開発を例に考察してみたい。

○特別展のパッケージ化 —「韓国・ソウルの子どもの一日」パックの開発

初期の7種に続いて開発が進められた「韓国・ソウルの子どもの一日」は，キット作成のためにテーマを選ぶという手法ではなく，特別展「ソウルスタイル」の開催にあわせて，特別展のテーマを子ども向けに編み直して制作された。展覧会では，ソウルに暮らす李さん一家の日常をモノを通して紹介していたが，キットも同様に子どもの一日を子どもの持ち物で紹介していくという手法をとっている。中に入れる子どもの日用品は，特別展の協力者である李家の兄妹（当時小学校6年生と4年生）らに同行してもらい収集された。現地に暮らす子どもの視点でモノが選ばれているというのも，このパックの特徴である。

このパックは，特別展の開催にあわせて運用が試行された。当時はまだ「みんぱっく」の貸し出しそのものが始まっていなかったため，このソウルのパックが運用方法そのものを検討する機会となった。特別展の会場にパックの案内を設置し，遠足の事前事後学習の素材として用いてもらうことをアピールした。同じパックを3つ用意し，一カ

所への貸し出し期間を一週間という短い設定にしていたにもかかわらず，パックの予約は次々とうまり，特別展とあわせたパックの貸し出しは好評を得た。ここで，貸し出しの手順やそれにかかる書類の形式や使用後のアンケートなど，運用手続きの手法が試された。また，授業で使用されている様子の視察も行った。

特別展での試行により，短期間で多くのデータが集められた。それによって，普段目にすることのない民族衣装や楽器などの一般的に珍しいと考えられるモノと同様に，子どもらにとって身近な日常品に人気があつまることや，食についての関心や要望が高いことがわかった。

アンケートをもとにした改良点の洗い出しと再調査により，新しい資料をパックに加えることとなった。まず，子どもの日常に強い関心がよせられていることから，日常生活として主に学校での様子を知ることができるような写真集が作成された。教室，給食，下駄箱，帰り道など，学校にまつわる子どもにとっての「あたりまえの風景」を知ることができるものである。また，食についての要望が多くでていたため，学校給食のメニューを紹介することとした。すでにパックの中に給食用トレーを入れており，それを有効に活用してもらいながら食についての情報が得られるよう改良することにした。食については「本物」を入れることができないので，一つひとつのメニューを写真に撮り，現地小学校で使用されているトレーにはめて使用できるように考案された。現在，この給食セットは，人気資料のひとつとなっている。

○授業と情報のデザイン　―「ブリコラージュ」パックの開発

ソウルのパックと同様に「ブリコラージュ」のパックもまた特別展のテーマをもとにして制作された。このパックは，特別展「きのうよりワクワクしてきた。ブリコラージュ・アート・ナウ　日常の冒険者たち」にあわせて開発された。この展覧会がテーマにかかげている「ブリコラージュ」とは，フランスの人類学者レヴィ＝ストロースが未開の地に暮らす人々の「身近な素材を用途にあわせて有効に利用する」という「野生の思考」にあてたフランス語である。そこで，この「身近な素材を用途にあわせて有効に利用する」という考え方が，パックのテーマとなっている。展覧会では，ブリコラージュ的な手法で作品をつくっている作家の作品や，ブリコラージュ的につくられた民博の収蔵資料が展示された。これまで「みんぱっく」は，どのような授業で用いるかということを提示せずに，テーマにそってモノを選ぶという方法で作られてきたが，ブリコラージュの場合はその手法では，何を入れるべきなのかが難しく，また展覧会と同じような作品や資料をただ入れただけではパックの意味や魅力が伝えきれないのではないかと考えられた。そこで，ブリコラージュのパックの開発を進めるにあたり，小学校教諭に参加を依頼した。開発にあたったメンバーで，授業のデザインとパックの開発が並行して行われた。具体的な使い方を考えながら開発していくことで，これまでのパックに

なかった資料が用意されたり，パッケージの仕方そのものにも工夫がこらされることとなった。

ブリコラージュのパックは，これまでのパックと異なる点が多くある。まず，それまでのパックのすべてが市販のスーツケースに入れられているのに対して，ブリコラージュパックでは，その全体がパッケージされるボックスそのものがブリコラージュ的な手法を多用して制作されている。外側のボックスも，資料一点一点を入れるケースも，身近な素材を利用して作られている。また，パックのテーマである「ブリコラージュ」という人類学の専門用語を，子どもや教師らも使いこなすことのできる言葉として紹介するために紙芝居形式の資料カードが作成された。この紙芝居は，主として常設展示場に展示されている標本資料を例にあげて，モノとその素材について考えることができるストーリーになっている。紙芝居の内容はそのままポスターにもデザインされ，パックと博物館を広報するためのツールとして，また常設展示場を観るための一視点を提示するツールとして学校へ配布された。

○ウェブページの活用

現在，「みんぱっく」の貸し出しはウェブページから予約状況を確認したり，パックの種類やその内容物を知ったりすることができるようになっている[7]。各パックの概要を知るだけでなく，ひとつひとつのモノについて，「モノ情報カード」と同じ内容をPDFファイルでダウンロードして印刷することも可能である。「みんぱっく」を借りる学校が実物とともに情報を入手するだけでなく，パックが届く前後にも情報が入手できる。また，パックを借りなくとも，ウェブページの情報により学校と「みんぱっく」をひいては博物館をつなぐことが可能となるだろう。

ソウルのパック以降，「みんぱっく」の開発は，特別展の開催にあわせて進められるケースが続いた。展覧会の事前事後学習に有効なツールとなるだけでなく，開発側としては，特別展のエッセンスがパックされる機会ができるし，図録はパックの格好の参考図書として機能するなど，そのメリットは大きいと思われる。

「みんぱっく」には，パックごとに特定の教育目標を定め，その達成のために教授方法が示されているわけではない。そのため，教師が児童生徒を教育するためだけの道具というよりはむしろ，教師と児童生徒がともに学ぶための「学習材（学びのリソース）」と考えることが適当だろう。したがって，「みんぱっく」の使用方法は限定されておらず，教師の授業デザインや児童生徒の学びによって，学習材としての可能性は無限にひろがり，使用方法もその数だけ存在することになる。しかしながら，ブリコラージュのパックのように，ある「使い方」を想定することで，より使いやすいもの，伝わりやすいものになる可能性もある。それまでに開発されたパックも，教師らからの声を参考に

してきたが，具体的な授業がイメージされながらというわけではなかった。教師らに，聞き取りやアンケートなどの調査だけに参加してもらうのだけでなく，開発の過程でメンバーのひとりとして議論に参加してもらうことの意味は大きいだろう。

5 むすび

「みんぱっく」の企画・開発・実験的運用を通して，このようなキットが様ざまなヒト，モノ，コトをとりむすぶコミュニケーションメディアとなることがみいだされた。

○媒体としてのツール　―つながりを創る

「みんぱっく」は，民族学研究者，教育学研究者，展示業者，デザイナーなど，立場のことなる人々による協働作業や研究会と，学校現場での試行調査を経て制作されてきた。調査研究と交流の会「みんぱっく厨房」も，創造とつながりの場としてデザインされている。「みんぱっく」の制作そのものが「つながり」を創る場となっていると言える。

こうした開発の場にはじまり，アウトリーチキットを使うことは様々なつながりを創ることでもあるだろう。キットの貸し出しで，学校と博物館がつながる。キットを使ってどのような授業をデザインするかを話し合うことで教師らがつながる。生徒児童がキットと出会うことで，異文化や博物館とつながる。キットを使った探求を進めることで教師と児童生徒が，また児童生徒同士がつながる。こうしたプロセスを経ることで，キットにかかわる様々な人々が次々とつながっていくことが予想される。

○研究成果を伝えるメディア　―研究者のまなざし

「みんぱっく」は，民博教官の視点によって選択されたモノとそれにまつわる情報を用いて，その地域や民族について学ぶことを通して，民族学研究者のもつ異文化へのまなざしを感じ取ってもらうための道具となることができる。ある地域や民族についての知識を覚えさそうとするもの，子どもたちに正しい異文化理解の方法を教え込もうとするものというよりは，民族学研究という異文化理解のための一視点を，各研究者の視点という具体例を通して伝えることができるツールと考えられる。すなわちこのようなキットの開発によって，研究成果を伝えるメディアの可能性，国際理解教育を支援するメディアの可能性は，さらにひろがるにちがいない。

○学びのリソース　―学びを創る

「みんぱっく」は教師が児童生徒に，ある定められた教育目標にそって何かを教えるための教材というよりはむしろ，教師と児童生徒がともに学ぶための学習材と考えられる。教材が教師が教えるための道具であるのに対して，学習材とは，学び手が理解を深

めるための道具と考えられるだろう。

すなわち，このようなキットは，モノを通して異文化と「であう」，自分の興味にそってテーマをきめてその課題とじっくり「むかいあう」，学び手が自分なりの意味や価値をもった作品を「つくる」，それぞれの作品をともに「あじわう」という学びのプロセスを児童生徒と教師がともに創っていくことの支援に貢献すると考えられる。このような学びのプロセスを経ることで，アウトリーチキットという小さな博物館で学んだ子どもたちは，異文化理解のための視点を身につけたり，モノから様ざまな情報を読みとれたりするようになり，そこから新しい探求を進めていけるようになるのではないだろうか。実際に博物館に行ったときに，以前と異なる視点で展示資料と向き合うことも期待される。こうしたキットの開発は，博物館から学校へ新しい学びを提案したり，学校と博物館が新しい学びを創りあげていったりすることを可能にする，コミュニケーションのツールになると考えられる。

〈謝　辞〉

筆者にとって学び多いプロジェクトでした。ご協力いただいた学校現場の先生方、共に議論を重ねてきた民博および株式会社日展のスタッフの方々に感謝いたします。

注

1) 開発に至った経緯については，野林厚志「ふれてはじまる知のいとなみ」http://www.minpaku.ac.jp/museum/kids/minpack/concept.htmlに詳しい。
2) 本稿は，国立民族学博物館民族学研究開発センター編『国立民族学博物館平成12年度13年度「みんぱっく」（民族学学習キット）の企画開発及び実験的運用』2001年において，筆者が執筆した部分に大幅な加筆を行い書き改めたものである。なお，報告書において筆者が執筆した部分を引用及び転載した場合はとくに典拠を示していない。同報告書において筆者が執筆した以外の箇所を引用したものについては，それぞれについて典拠を示した。
3) 野林厚志「平成12年度の企画・開発」同上報告書。
4) それぞれのパックの開発を担当した教官は次の通り。「極北を生きる―カナダ・イヌイットのアノラックとダッフルコート」岸上伸啓。「アンデスの玉手箱―ペルー南高地の祭りと生活」関雄二。「ジャワ文化をまとう―サルンとカイン」福岡正太。「イスラム教とアラブ世界の暮らし」西尾哲夫。「ブータンの学校生活」栗田靖之。「インドのサリーとクルター」杉本良男。「野林リュック」野林厚志。
5) それぞれのパックを担当した教官は次の通り。「ソウルスタイル―子供の一日」朝倉敏夫，佐藤浩司。「インドネシアジャワの芸能」福岡正太。「アラビアンナイト」西尾哲夫，山中百合子，野林厚志。「ブリコラージュ」佐藤浩司。
6) 一般への運用が開始された平成14年度の実績については，館内の学習支援ワーキンググループによって「平成14年度学習キット『みんぱっく』に関する運用報告」としてまとめられた。
7) http://www.minpaku.ac.jp/museum/kids/minpack/